

何かと訳あり、で迎えた平昌五輪だが、日本選手の活躍もあって、思いのほか盛り上がりを見せた。五輪のたびに思うのだが、日本選手、日本人の礼節や誠実公正さが際立っている。いや、実際には外国選手、組織、応援のほうに偏りや不正さが目立つばかりに、「日本の常識」が際立つのだろう。

貪欲に勝利を競い、闘争本能むき出しの相手の前では、日本の常識は単なる「おひとよし」で終わる。確かに、それに対する国際的評価は高いのだが、それを見習おう、という国はあまり見かけない。

それどころか、年々、競争心は増し、勝つことが最優先！という現実を目の当たりにする始末だ。いい？ 悪い？ の問題ではない。競争に勝つことへの執着の違いであり、各国の五輪報道においても、その違いは顕著だ。

日本のメディアは、何かにつけて、政治や商売とは一線を画した「清廉潔白」なスポーツマンシップに焦点をあてるが、海外メディアは、五輪は商売であり、国威発揚も含めた政治的要素も当然という姿勢が一貫している。

「ええかっこしい」か「リアリスト」か、見る立場で評価が分かれるのも無理のないことだ。今回、ドーピングの問題はあったにせよ、「ロシアの排除」は明らかに政治的で、ヨーロッパとの対立は決定的だ。15歳の金メダリスト「ザギトワ」は、嫌がらせのようなドーピング検査まで受けた。

また、「いいモノを作れば必ず採用される」と、真正直にジャマイカを支えてきた大田区の「下町ボブスレー」は、謀略により裏

## 『五輪の教訓』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

切られた。  
五輪とは無関係の「北朝鮮ファイバー」については言うまでもなからう。

政治や商売（経済）の勝負の時、正直な「いい人」が役に立たないことが、国際社会の厳しい現実であり、哀しいかな、「いい人積立」だけでは、イザという時、頼りにならない。厳しい世界で生きていく人ほど、身に染みてその現実を知っている。そして、逆境にも強い。大人の事情で一時は出場すら危ぶまれたフィギュアの女王、ロシアの「メドベージェワ」は、五輪の目前にこんなことを言っている。

「試合は毎日毎日、戦争のようなものよ……」  
汚い大人の世界への皮肉まじりの嘆きなのかもしれない。18歳にして既に、国際社会の不合理に立ち向かい、逆境を乗り越える強さを持っている。

われわれ日本人も、国際社会の厳しい現実、しっかりと目を醒ます必要がある。近い将来、「いい人」という常識が、間違ったシグナルを送り、国際社会で不合理な扱いを受けることが多々あるだろう。

なにしろ、核兵器により市民を大量虐殺されても、文句を言わない国だ。「いい人」は文句！を言わない。そして、雑に扱われ、不利益を押し付けられる……傷ましい現実だ。油断とおひとよし最悪の不合理を招く。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
『雲涯蒼天』  
定価700円  
Amazonにて販売中